女御を、后にすゑ給はぬを、かこち給ふ意を含め給へるなり。○いかで云々』何とてか、おろそかに思ふべき、さる心は侍らねど、梅壺をさしおきて、遵子を后位にすゑたるは、其父頼忠の、關白たる勢におされて、やむを得ず、せし事なれば、おのづからのありさまなりと也。○上達部云々』上達部よりはじめて、女房にいたるまで、祿など賜ひ、さまざま結構なる事ども、殘るくまなく、懇にし給へりとなり。こまかには、懇にの意なり。○四日目にて』參内の日より、四日目にて、十一日の曉、女御、若宮、東三條院に退出し給へるをいふ。○今この頃過して云々』今少し、時日を過して、心しづかにまゐらむと申し給ひて、退出し給へりとなり。○我御心のおこたり』かく女御の心うちとけ給はず、退出し給へるは、わが心に、ゆきとどかぬところあるが故なりと、思しめさるとなり。例の立后の事を、含め給へり。○故女御の御はて』喪の終りにて、一週忌の法事をいふ。但し、女御超子は、此年正月廿八日にうせ給ひて、未だ一年にみたざれど、年内にくりあげて、おこなはれたるなるべし。○哀にいみじき御事』御讀經、説法など、何くれと御追福のことを、懇にしつくさせ給へりとなり。○このわたりの御事は云々』兼家は、其女梅壺の女御の御事は、今はかくありとも、一年二年の中には、后位にのぼり給ふ事もあらむと、心強く頼みに思へりとなり。かゝる程に、年號もかはりて、永觀元年といふ。正月よりはじめ、ここども世の常にて、過ぎもてゆく。そのことゝある折こそあれ、はかなく月日も過ぎもて行くに、若宮(一條)を、心安くもあらず、もてなし聞えさせ給ふを、内(圓融)にも、いと苦しう思し召すべし。(圓融)上「今はいかでおりなん」このみ思さるゝうちに、御物氣も、恐しうおこらせ給ふにも、冷泉院の御有樣を、恐しとおぼしめさる。冷泉院は、猶例の御心は少くて、あさましくてのみ過ぐさせ給ふに、はかなくて永觀二年になりぬ。「今年だに必ず」と思し召して、人知れず、さるべきやうに思しめさるべし。東三條(兼家)のおとゞ、たはやすく參り給はぬを、いとあやしうのみ思しわたる。梅壺(詮子)の女御の御もとにも、猶若宮(一條)の御いのり、心ここにせさせ給ふ。かくて、さるべきつかさかうぶりなど、多くよせ奉らせ給ふ。』

○年號もかはりて』日本紀畧に、永觀元年四月十五日庚子、詔書改元爲永觀元年、依去年炎旱、并皇居火災等也、大赦天下、大辟以下罪、咸赦除之、常赦所不免者不赦、又老人僧尼、給穀有差とあり。○ことども云々』元日の四方拜以下の朝儀、何くれの事ども、年來どかはらず、行ひゆくをいふ。○その如く云々』朝儀、祭など、其事あるときこそ、何くれとのゝしれど、その外はさしたる事なくて、はかなく、月日の經ゆくとなり。○若宮を云々』かくのみにて、この皇子の、遂には、東宮にたち給はむ事も、おぼつかなしと、兼家の思へるよしなり。○内にも云々』御門もまた、若宮の御事を、心苦しく、氣の毒におぼしめすとなり。○いかでおりなむ』何とぞ、位を讓り給はむとおぼすをいふ。○御物氣も云々』圓融帝御惱にて、御物氣しげうおこらせ給ふにつけても、御兄冷泉院は、年頃、御ものゝけおはしますを、口しさ事に思しめさるとなり。○例の御心云々』冷泉

七月の下の字原本になし眞本に據て補ひつ●見せ來らばやとあり見せばやの誤本に據て改めつ●心據て補ひつ四眞小本になしの字眞本に據て改めつ●若宮をこそ西眞小本にはなしの字眞本に據て改めつ

あるべき四本にあるべきさあり●女御殿にもの下原本にもの二字あり●後撰本に據て除きつ

すまひ原本にすまふとあり平本に據て改めつ

院は、いつも平常の御心にておはする事は、少くて、あさましく、狂氣がちにてのみ、過ぐさせ給へりとなり。○今年だに云々』せめて、今年なりとも、必ず位を讓らむと、人に知らさず、内々に、其事を思はせ給ふとなり。年頃讓位の事を思召し給へれば、今年だにといへり。○いとわやしう云々』御門の思すさまなり。○若宮の御いのり云々』此事、他書に見えざれば、詳ならず。次の段に、若宮立坊の事を祈り給へる事あれば、こゝも、其御祈にや。○さるべきつかさかうぶり云々』御祈の事を奉仕せる社司に、位賜はり、又神社へゝ、封戸をゆまた寄せ奉らるゝをいふ。こゝには、何とも見えざれど、春日社などに、祈願をこめ給へるにや。なほ考ふべし。

時々の事ども、はかなく過ぎもて行きて、七月の相撲も近くなれば、「これを若宮（一條）に見せ奉らばや」と、のたまはすれど、大臣（兼家）少しふさはぬやうにて、過ぐさせ思ふに、度々（兼家）おこど參らせたまへ」と、内よりめしあれど、みだり風など、さまざまの御さはりどもを、申させ給ひつゝ、參らせたまはぬを、相撲近くなりて、頻に、「參らせ給へ」とあれば、參り給へれば、いとこまやかに御物語ありて、位（圓融）につきて、今年十六年になりぬ。今まであべうも思はざりつれど、月日のかぎりやあらん、かく心よりほかにあるを、この月は、相撲のことあれば、騒しかるべければ、來月ばかりにとなん思ふを、東宮（花山）位につき給ひなば、若宮（一條）をこそは、春宮にはするぬめと思ふに、いのり所々に

よくせさせ、思ひの如くあべう祈らすべし、おろかならぬ心の中を知らで、誰々も、心よからぬ氣色のある、いと口惜しきことなり、數多あるをだに、人は、子をば、いみじきものにこそ思ふなれ、ましていかでか、おろかに思はん」など、萬あるべき事ども仰せらるゝ、うけたまはりて、畏りてまかでたまひて、女御殿（藤子）にも、さざめき申させ給ひて、御殿油召し寄せて、暦御覽じて、所々に御いのり使ども立ち騒ぐを、かう〳〵とのたまはせねど、殿の中の人々、氣色を見て思へるさま、いふも愚にめでたし。この家の子の君達、いみじう、えもいはぬ御氣色ぞもなり。さてすまひなどにも、この君達參りたまふ。大臣（兼家）の御心の中、はればれしうて、交らせ給ふ。』

○時々の事ども』折々につけて、おこりし出來事も、これといふ事もなくて、はかなく月日のたちゆくとなり。○七月の相撲』毎年七月に行はるゝ相撲の節にて、上に見えたり。○ふさはぬやうにて』兼家の心に應せぬやうにての意にて、俚言に、氣にいらぬといふ意なるべし。或説に、若宮の見給ふには、少々相應せぬよしといへれど、いかがあらむ。○みだり風』風邪の病をいふ。蜻蛉日記に、まだしきに、すけのものに、みだり風おこりてなむ、さこえしやうには、えまゐらぬなど見えたり。○さまざまの御さはり』いろ〳〵の故障をいふ。○こまやかに云々』懇に御はなしありてとなり。○位につきて云々』御即位ありし安和二年より、此永觀二年まで、十六年になれり。○今

まで云々』かく今日まで、位にあるべしとは、思はざりしが、いつまでと、月日の限りあるにや、かく思ひの外に、久しく帝位に居たるを、今は譲位せんと思へど、この七月は、相撲の節になりて、さわがしさをもて、來八月頃にいたりて、位を譲らむと思ひ定めつ。其時に至り、東宮天位に即かせ給ひなは、其次には、若宮を太子には立て給はむと思へば、事故なく、立坊あるべき御祈を、所々の社々寺々に命じて、思ひの如くならむ事を、祈請せしむべしとなり。○おろかならぬ云々』女御、及び若宮に對して、疎遠に思はざる、朕の心の中をも推量せずして、大臣をはじめ、女御も、兄弟どもも、朕に對して、不快の容子あるは、心得ず、口惜しきわざなり、さて、誰しの人も、子を愛するおもひはおなじく、たとひ幾人ありとも、いみじく鍾愛するものなり、ましてや、朕はただ、皇子一人のみなれば、いかでか、おろそかに思ふべき、わけて、いとほしく思へりとなり。○まかで給ひて』兼家、東三條に退出してと也。○さざめき』耳語するをいふ。○暦』和訓栞に、暦日をいふ、日讀の義、二日三日とかぞへて、其事を考へ見るものなれば、名とせるなり、欽明天皇の時に來る暦本を、こよみのためしとよめりとあり。清和天皇貞觀三年、長慶宣明暦經を頒行せられしより、三代實錄に見えたれば、當時これを用ひしなるべし。また、暦に、具注暦、七曜暦の二種あり。具注暦を譯したる假名暦も行はれて、具注暦は、前年十一月、中務省之を奏進し、七曜暦は、正月同省進奏せるよし、内裏式、延喜式、公事根源に見えて、其考說は、文藝類纂に詳なり。○御いのり』即ち立太子の御祈願なり。○殿の中の人々』東三條につかへたる人々も、其ゆゑよしは抑せられねど、兼家父子の樣子を見て、それと察するをいふ。○えもいはぬ御氣色』昨日にかはりて、いはうやうもなき、御樣子なりとの意。○相撲などにも云々』前には、若宮の見物し給ふたに、兼家は、ふさはぬやうにいへるを、受けてかけるなり。日本紀略に、永觀二年八月一日戊寅、於堀川院有相撲事とあり。○はればれしう』心のさわやかになれるをいふ。

かくて八月になりぬれば、二十七日御譲位ことのゝしる。その日になりぬれば、御門はおりさせ給ひぬ。春宮（花山）は、位につかせ給ひぬ。春宮には、梅壺の若宮（一條）居させ給ひぬ。いへばおろかにめでたし。世はかうこそはと、見え聞えたり。おりゐの御門は、堀河の院にぞおはしましける。今の御門（花山）の御年なども、おとなびさせたまひ、御心おきても、いみじう色におはしまして、いつしかと、さべき人々の御女どもを、氣色だちのたまはす。太政大臣（頼忠）、この御世にも、やがて關白せさせ給ふ。中姫君（遵子）、十月に參らせ給ふ。まづほかをはらひ、我一の人にておはしませば、さはいへど、御心のまゝに思しおきつるも、あるべき事なりこそ見えたる。』

○御譲位』名目抄に、譲位（ジヤウヰ）、又遜位、有節會と見えて、其儀、貞觀儀式、北山抄、江次第などに詳なり。さて、圓融帝御譲位の事は、日本紀略に、永觀二年八月廿七日甲辰、天皇譲位於皇太子云々、自閑院第、移御堀河院受禪、即日入内裏、儀一如行幸、天皇留御堀河院とあり。○東宮には云々』同書に、此日立懐仁親王、爲皇太子、令太政大臣藤原朝臣關白萬機、一如朕時とあり。○世はかう

（關白せさせの下給ふの二字原本になし諸本に據て補ひつ）

女御の下の字印本になし今活太に據りつ

こそ云々』かうこそはの下、あるべけれの文を省けるなり。○堀河の院にぞ云々』此事は、前に引ける、日本紀略に見えたり。○御門なども云々』おとなひは、成人し給へるをいふ。百錬抄に、華山天皇、永觀二年八月廿七日受禪、十七とあり。○色におはしまし』色めかしくおはしますをいふ。○いつしかと云々』人々の女どもを、いつか早く入内させよと、待ちかね給ふけはひしたまふとなり。○太政大臣云々』頼忠關白の事、上にひける、日本紀略に見えたり。○中姫君』中宮遊子の同母妹にて、母は代明親王の御女なり。日本紀略に、永觀二年十二月廿五日庚子、太政大臣女藤原諟子入內、以承香殿爲休所とあれは、こゝに十月とあるは、二の字を脱せるならむ。○まづはかをはらひ云々』一の人は、關白をいふ。上に註せり。頼忠のさまなり。かく外より、女御をたてまつらむとするを、はらひのけて、我御女をまゐらせたるは、あまりなりと思へども、頼忠は、關白なれば、我心のまゝにはからひつるも、然るべく、道理に見えたりとなり。されど、これよりさき、十月十八日爲光の女、十二月五日朝光の女入內せるよし、日本紀略に見えたれば、この一段は、正史とあはず。あやまれり。

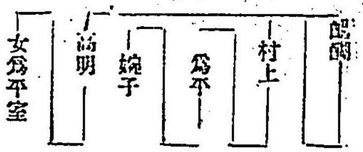
御即位、大嘗會、御禊やなど、事ども過ぎて、少し心のどかになるほどに、太政大臣（頼忠）急ぎ立ち參らせ奉り給ふ。女御（諟子）の御有樣、仕う奉る人にも、七八年にならぬかぎりは、見えさせ給ふことかたければ、さかくの御有樣聞えがたし。まさにわろうおはしまさんやは。かくやんごとなくおはしませば、いといみじう時にしも見えさせ給はねど、おとど（頼忠）、后には、我あらばと思すべし。』

○御即位』もとは、ショクヰとよみたるを、後世ソクヰといひならへるよし、速水房常の名目抄註に見えたり。さて、即位は、踐祚とは別にて、代始和抄に、即位といふは、天子受禪の後、正しく南面の位につかせ給ひて、始て百官に、龍顏を見えさせ給ふよし也とありて、踐祚の後、太極殿にて行はるゝ儀なり。其さまは、貞觀儀式、江次第等に詳也。さて、華山天皇御即位の事は、日本紀略に、永觀二年十月十日丙戌、天皇即位於太極殿、宣命如常とあり。○大嘗會』帝王編年記に、永觀二年十一月廿一日辛卯、大嘗會、悠紀近江國高嶋郡、主基丹波國天田郡、御屏風佐理書之とあり。○御禊』日本紀略に、永觀二年十月廿五日乙丑、大嘗會御禊、午刻御出、左大臣以下參入、右大臣爲節下、太政大臣息女爲女御とあり。○七八年ならぬ云々』七八年は、年久しくの意にて、年數をそれとさしたるにはあらず。御有樣は、御容貌の美醜、御性質のよしあしをいひ、見えさせは、見られさせにて、拜顏の意なり。さて、年久しく仕へ奉れる人にあらねば、女御に拜顏する事かたければ、其容子のよしあしは、申しがたしとなり。○まさに云々』まさには、誠にの意、やゝゝ、反語にて、さまことにあしき御容子には、あらざるべしとなり。○時にしも云々』○君寵おはしますをいふ。○后には我あらばと』我かく關白にてあらば、この女御を、必ず皇后に立て奉らむと、思すべしとなり。

かゝる程に、式部卿（爲平）の宮の姫君（婉子）、いみじう美しうおはしますといふ事を聞し召し

て、日々に御文あれば、かばかりの人を、引きこめてあるべきにあらずこ思して、急ぎたち參らせ給ふ。故村上、いみじきものに思ひ聞え給ひし四宮（爲平）の、源帥（高明）の御女の腹にうませ給へる姫宮（婉子）にて、御なからひも、あてにめでたうて、姫宮も、いこ美しうおはしますを、あべいかぎりにて、參らせ給へれば、唯今は、いこいみじう思ひ聞えさせ給へれば、かひありてめでたし。只今は、かばかりにておはしぬべきを、又朝光（雅平）の大將の姫君（婉子）「參らせ給へ」こ、きふにのたまはすれば、いかがせましこ思しやすらふに、「東宮（一條）はちごにおはします、かやうの方にもこ思はんには、さは參らせ奉らんのみこそはよからめ、又この姫君（婉子）を、誰か愚には思さん」など、思ほし立ちて參らせ奉り給ふ。』

○式部卿の宮の姫君』大鏡に、これを恭子女王としたれど、皇胤紹運錄に、恭子女王は姉にて、齋宮なるよし見えたれば、今同書、及び一代要記によりて、婉子としたり。○引きこめて云々』引こもらせての意にて、かくばかりの美人を、いつまでも、我家にのみ引こもらせ、おくべきにあらずと也。增鏡藤衣の卷に、御はらからの姫君も、かたちよくおはするに、引こめがたしとて、內侍のかみになし奉り給ふなどあり。○參らせ給ふ』日本紀略に、寛和元年十二月五日甲辰、式部卿爲平親王息女婉子、入掖庭爲女御とあり。○いみじきものに云々』村上帝の、爲平親王を鍾愛し給ひし



世にの二字原本にこゝにとあり諸本に據りて改めつ

事は、月宴の卷（四上ノ四）にあり。○源帥』源高明にて、太宰權帥なれば、略して云かいへり。高明太宰權帥に貶せられし事も、同卷（上ノ一〇六）にあり。○御なからひも云々』雅言集覽に、親族ッヅキノ人と見え。源氏物語東屋の卷に、上達部の筋にて、なからひも、物ぎたなき人ならずとあり。さて、爲平親王は、村上帝の皇子、源高明は、醍醐帝の皇子なれば、いづれも皇統にて、高貴なる御親族と也。○あべぎ限りにて』充分に裝ひ飾り給へるをいふ。○かひありて云々』君寵淺からざりしかば、其詮ありて、めでたしと也。○かばかりにて云々』關白頼忠の女諟子、及び此婉子女御の參り給へば、今の處にては、夫にて宜しくおはしますべきに、又朝光の女を、召し給へりとの意也。朝光の女は、この二人の女御より、早く入內あれば、こも順序違へり。○朝光の大將の姫宮』尊卑分脈、一代要記、十三代要略等、姫子としたれど、日本紀略、大鏡裏書に、姚子とあるによれり。○きふに』急の字音にて、本書、及び源氏物語などに、多く用ひたり。○東宮は云々』この永觀二年は、五歲にならせ給へり。○かやうの方』女御御息所などをいふ。さて、此女を、遂には女御御息所に、參らせんと思へども、東宮は未だ幼くおましませば、女御御息所など召さむは、今日あすの事にはあらじ、さらば、かやうに、女御など望み給はむ君に奉らむこそ、よき折ならめとなり。○誰か愚には云々』誰かおろそかに、思ふべきとにて、誰かのかは、反語なり。

この大將（朝光）殿は、堀河（兼通）殿の三郎、あるが中にめでたきおぼえおはしき。今に世に捨てられ給はず。母上は、九條（師輔）殿の御女、登花（登子）殿のないしのかみの御腹に、延喜（醍醐）の御門の

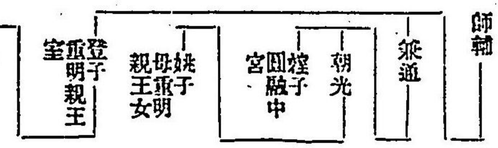
御女爲榊本に中の宮とあり

故中宮原本に此中宮とあり西小本により改めつ

御子の、重明の式部卿の御女におはします。その、姫君にて、世にをかしげなる御おぼえおはす。えもいはずめでたうおはずなれば、さりともおろかならんやはとて、参らせ奉り給はんと思したちて、志はすに参り給ふ。故堀河殿（兼通）の御たからは、この大将（朝光）の御もとにぞ、皆わたりにたる。故中宮（煌子）の御物具ども、唯この殿を、いみじきものに思ひ聞えさせ給へりければ、それも皆、この殿にぞ渡りにける。いみじうめでたくて参らせ給へり。』

○三郎』下に、にての意をはぶけるなり。○あるが中に云々』あまたある兄弟の中にも、父兼通に鍾愛せられたりとなり。○世にをかしげに』世の人に、をかしげに思はれおはしたりとなり。○志はすに云々』日本紀略に、永観二年十二月五日庚辰、大納言朝光卿第一女子姚子初参内、以麗景殿爲休所とあり。○故中宮』圓融帝の皇后にて、朝光の姉なり。○御物具』御調度の類にて、下のこの殿にぞ云々に、つづく文脈なり。○唯この殿を云々』故中宮も、この朝光を、いみじく頼もしく思ひ給へればとなり。

この母宮（朝光）には、殿は、今は御心かはりて、枇杷の大納言延光の北の方は、故敦忠權中言の御女なり。それに、大納言（延光）うせ給ひて後は、おはし通ひて、この上（兼通）をば、唯よそ人のやうにておはするに、男君達二人、この姫君（姚子）におはすれば、何事もやんごとなく



ならせ給へりかの原本にならせ給へるがとあり諸本により改めつ

小一條印本に故一條とあり諸本により改めつ

ぞ、思ひ聞え給へれど、さやうの事は、同じ所にて、あつかひ聞え給はんこそよかべけれ。よそ〳〵（筆）にはならせ給へり。かの枇杷の北の方（敦忠女）、いみじうかしこう物し給ふ人なり。この上（兼通）は、ちこのやうにおはしければ、いかにこのみ、世人いひ思へり。小一條大將（濟時）の北の方も、此枇杷の大納言（延光）の御女におはしければ、いとおとなくしき御まゝむすめの程などを、世人、内々には、聞ゆべかめれど、大方大將（朝光）の御おぼえの、いとこいみじければ、人もえ聞えぬなるべし。御母ばかりこぞいはれ給ひける。』

○この母宮』女御姚子の御母、重明親王の御女なり。○御心かはりて』變心にて、他へ心のうつるをいふ。即ち離婚のさまなれど、當時、婚姻の慣習は、律令のとはうらうへにて、妻を妻るも、常に女家にかよひて、我家によび迎ふる事なさまなれば、離婚もまた、嚴重なる制裁あるにあらず、足遠くなりゆき、はた他の家に、心をうつしてかよびゆけば、もとの妻は、自ら離別のすめがたとなれるなり。そは、本書、及び源氏、狹衣等の物語、枕草紙などに見えたり。さて、今は御心かはりて、延光の北方におはしかよひたりとなり。○大納言うせ給ひて後』公卿補任に、天延四年、權大納言從三位延光、五十、春宮大夫、六月十四日依病入道、同十七日薨、號枇杷大納言とあり。○この上』女御姚子の御母なり。○よそ人のやうにて』すこしも關係なき、他人のやうにあるをいふ。○男君達二人』大鏡には、をとこ君三人、女君のかがやくごとくなるおはせしと見え、尊卑分脈にも、朝經、相任、登明の三人の母を、此北方としたれば、本書の二人は、三人を寫しあやまれるに

や。○かしこう』利巧の意。○ちごのやうに』本の北の方は、小兒の樣に愛らしくおはしければ、それをふりすて丶、年老いたる延光の北方に、思ひつかれしは、いかなるゆゑよしかあらむと、世の人は思へりとなり。こは、大鏡に、この閑院の大將殿は、後には、この公達の母をば去りて、枇杷の大納言延光の卿のうせ給ひにし後、そのうへの、年老いて、かたちなどわろくおはしけるにや、ことなる事さこえ給はざりしを、住み給ひし、とくにつき給へるとぞ、世人申しふ、さて世おぼえも、劣り給ひにしぞかし、もとの上、御かたちもいとうつくしく、人の程もやむごとなくおはしましかど、ふかうにおはすとて、かゝる北の方をまうけて、さり給ひにしぞかし云々とあり。○小一條大將云々』濟時、延光の女、朝光の後室の腹なるを、北の方とせる事、月宴の卷にもいでたり。○おとな〳〵しきまゝむすめ云々』おとな〳〵は、大人を重ねいへるにて、意は同じ。まゝむすめは、繼女なり。さて、濟時の北の方は、この朝光には、あまり年よりたる繼女なるよと、世の人々は、蔭にてうはさえたれど、朝光は、耻かしともせず、後妻を、甚しく寵愛したるをもて、後は何ともいはずとなり。この朝光は、永觀二年、未だ三十四歳なるに、濟時は、四十四歳にて、其北の方なれば、もしくは。朝光より年長なりしなるべし。されば云かいへり。○御母ばかりにや』後室は、朝光の母程に見ゆとなり。大鏡にも、年四十よばかりなる人の、大將には、おやばかりぞおはしける、いろくろくて、額にはながたうちて、髪ちぢけたるにぞ、おはしはるとあり。

かくて、女御(姚子)參らせ給へれば、御門(花山)、さまあしく時めかし聞え給ふ。時におはしつる

宮の女御(姚子)、御このゐ、この頃はおされ給へり。宮の女御、いでやなど、物むづかしう思しめすほどに、一月ばかり、隙なうまうのぼらせ給ひ、こなたに渡らせ給ひなどして、ここ人おはするやうにもあらず、もてなさせ給ふ。さはかうにこそはと思ふほどに、年もかへりぬ。』

○時におはしつる宮の女御云々』女御姚子を寵愛し給へる事、上に見えたり。○おされ給へり』姚子の寵遇あつきに、壓倒せられて、勢なきをいへり。○いでや』俗語のイヤモウといふに同じ。○ものむづかしう』雅語譯解に、ムサクサトシテキルといへり。こゝも其こゝろなるべし。○一月ばかり云々』姚子のさまなり。一月ばかりの間は、ひまなう、御門のめしによりて參り給ひ、あるは、御門御みづから、姚子の御曹司麗景殿に、わたらせ給ひなどして、他には、女御更衣も、おはせぬさまにて、ただこの女御のみ、君寵をかうぶり給へりとなり。○さはかうにこそ云々』女御の寵遇かくばかりなりと思ふとなり。○年もかへりぬ』寛和元年なり。

元三日の程よりして、いまめかしうさわやかなる御まつりごとどもにて、太政大臣(頼忠)もなまさまあしう、心えぬことに思すべかめれど、世に從ふ御心にて、さてありすぐし給ふ程に、閑院の大將殿(朝光)の女御(姚子)の御このゐ、怪しうかれがれになりて、はてはのぼらせ給へといふ事、思ひかけずなりぬ。たはぶれの御消息だに絶えはてゝ、

りぬ爲(榊本にたりぬましてわたらせ給ふ事はたゝて思ひかけずなり)御の二十六字に作れり(いみじうの四字原本になし諸本によりて補ひつ

まで平本にだにさあり

なにかぎみ爲(小本になりともの君さあり

一二月になり行き、あさましう、いかにあつることぞなど、大將(朝光)萬に思し惑へど、かひなくて、人わらはれに、いみじき御有樣にて、同じ内におはします人のやうにもあらず、なりはてぬれば、暫しこそあれ、人目も耻しうて、すべなくてまかで給ふを、いさゝか御出入をだに、知らせ給はずなりぬ。めざましういみじう心憂きことには、只今世に、この事より外に、申しいふことなし。大將(朝光)殿も、内へ參れば胸いたしとて、かきこもり居給ひぬ。世のためしにもあつべし。御繼母(敦忠女)の北の方の、いかにし給ひつるにかとまで、世人申し思へり。御門(花山)の渡らせたまふ打橋などに、人のいかなるわざをあたりけるにか。我ものぼらせ給はず。上(花山)も渡らせ給はず。目もあやに珍らかにて、まかで給ひにしかば、その後さる事やありしなどいふ事、ゆめになし。なにをかぎみなども、絶えて參り給はずなりぬ。世のためしにもなりぬべし』

○元三日』正月元日をいふ。名目抄に、元三(ゲウンサン)、後生以三字可令淸歟、故註之と見え、同註に、玉燭寶典曰、正月一日爲三元之日、歲之元、時之元、日之元、古今類書纂要曰、三元、元首也、正月初一爲歲之元、時之元、日之元、常房曰、仍元三トモ云也とあり。○いまめかしう云々』御門色めかしき御心ばへなれば、元日よりの儀式も、はなやかに當世風に、心のはれやかなる事どもにてとなり。御まつりごとは、朝儀の意なり。○なまさまあしう云々』頼忠は、御門のし給ふ事を、よろしから

ず、心におちゐぬ事とは、思へる樣子なれど、これも、時に從ふべき心にて、何事も、そのまゝに經ゆくとなり。○かれがれ』離れ〳〵にて、遠ざかる意なれば、女御の御とのゐ遠ざかりて、疎遠にせらるゝをいふ。○思ひかけず』思ひもよらず、更に其事なくなれりとなり。○御消息』字音のまゝに、せうそこと訓むべし。おとづれをいふ。晉書に、汝能齎書取消息否云々、發源機要に、報示消息者、以音信爲消息などありて、もとは、漢籍よりいでたる詞なれど、催馬樂の淺水に、「みもとのかたちせうそこにとぶらひにくるやさきむだちや」とあれば、ふるく用ひられたる詞也。さて御消息なき事、一二ヶ月になれりとなり。○人わらはれに』人の物わらひになるにて、人に嘲笑せらるゝ御有樣にてとなり。○同じ内におはします云々』御門さらにかへり見給はねば、他の女御と同じく、禁中に曹司を賜はりて、居給へる人のやうにもあらず、なり果てたればとなり。○暫しこそあれ云々』暫くの間は、かくて、宮中におはしたれど、何となく、人目にかゝるも耻しければ、せむかたなく、遂に宮中より退出し給へりとなり。○いさゝか御出入をだに云々』閑院の第より、出入し給ふ事だに、人目を耻ぢて、聊誰にも云らせず、密に出入し給へりと也。又内裏より、里第に退出せらるゝをも、御門は、御存知なきやうになりたりとにて、更にうとうとしくおはしますよしにも聞ゆ。さてこの女御の事は、大鏡にも、女君のかがやく如くなるおはせし、花山院の御時に、内へまゐらせ給ひて、一月ばかり、いみじう時めかせ給ひしを、いかにしてける事にかありけむ、まうのぼり給ふ事もとゞまり、御門も渡らせ給ふ事たえて、御文だに聞えずなりにしかば、一二月さぶらひわびてこそは、出させ給ひにしか、又さまあさましかりし事やはありし云々とあり。○御

繼母の北の方』彼延光の妻なりし人なり。○いかに云給ひつる云々』女御姚子の、俄に寵愛の衰へしは、北の方の、いかにさまたげしたる故にかあらむと、世の人は、申し思へりとなり。○御門渡らせ給ふ云々』打橋は、家屋雜考に、打橋とて、廊中の土間へ、跂橋（ハシ）の如き板橋をわたす事あり、それは、こゝへもかしこへも、移すべき料なれば、ウツシ橋の義なり、ツシの約チなれば、此名ありといへりと云々。細流に、切馬道に、板をうちわたして、かよふ道とあり。この女御は、もと麗景殿におはしつれば、清涼殿よりかよひ給ふ道の打橋をいふ。さて、其打橋などに、嫉妬のあまりに、人のいかなる惡戲をしたるにか、女御も、御座ちかく參り給はず、御門も、麗景殿に渡り給はず、かくのみにて過ぎしかば、ふしぎにあやしく、遂には退出し給へりとなり。こは、源氏物語なる、桐壺の更衣のさまに、いとよく似たれば、彼の物語によりてかけるにや。○ゆめになし』ゆめは、努々の意にて、ゆめ〳〵なしとは、かならずなきをいふ。樣々の悅の卷に、ゆめにきこしめしいれぬを、なども見えたり。○なにをかぎみ』女御の兄弟なる朝經、登明などの童名なるべけれど、いづれのにか、さだかならず。朝光卿集に、入道殿にて、なにをか君のなし給ふさま、おとなにも、まされり云々と見えたり。爲親本小杉本に、なりともとあるは、登明の事にや。

かくて又、小一條の大將（濟時）の御姪（姚子）女、一條大納言（爲光）の御女（祇子）などに、夜晝わかぬ御文もて參れど、小一條の大將（濟時）は、閑院の大將（朝光）の女（姚子）御の、おぼつかなからぬ程の御なからひにて、あさましく心憂しと思し絶えたれば、いひわづらはせ給ひぬ。村上などは、十二十人の女御御息所おはせしかど、時あるも時なきも、なのめになさけありて、けざやかならず、もてなさせ給ひしかばこそありしか、これはいとこゝの外なる御有樣なれば、思し絶えぬるなるべし。

○小一條大將の御女』月宴の卷（上ノ二四）に見えたり。○一條大納言』九條師輔の子爲光也。公卿補任に、貞元二年、中納言正三位藤爲光三十六中宮大夫、三月廿六日正二位、任權大納言、四月廿四日任大納言、廿五日大夫如元とあり。○おぼつかならぬ云々』おぼつかなきは、物事の不安心なる意にて、其反對なれば、安心なる意なり。さて、花山帝、姚子女御とむつまじき御間がらにて、安心に思へる程におはしながら、僅に一二ヶ月の中に、かくかれがれにならせ給へる、御門の御有樣を、濟時は、あさましく心憂き事に思ひて、今は我女どもを參らせむも、姚子と同じさまにて、其かひなかるべしと、斷念したれば、花山帝の參らせよとあるをいなみ奉りて、參らせねば、帝ものたまひあぐみて、後はめし給はずなりたりとなり。○村上などは云々』地の詞なり。さて、村上帝は、あまたの女御御息所おはしつれど、寵あるも、寵なきも、其區別をたて給はず、何れも平等に、愛憎なく、とりあつかひ給へり。さればこそ、怨めしく思ひ奉るものもなく、皆帝德に服して、嫉妬がましき事も聞えざりしなれ。さるに、此花山帝は、女御たちをもてなし給ふさまも、偏頗におはしまして、思ひの外なる御樣子なるをもて、濟時も、我女入内の事を、斷念したるならむとなり。御有樣なればの下、とての詞をはぶき、且花山帝の御さま、常にかはり給へるによりて、宮掖治ま

たて奉り給へば原本に奉りたれば云あり西園小本に據て改めつ

の御なこと原本に御なこと諸本に據て改めつ

立つなるべし原本に立つへしさあり平本によりて改めつ

らねば、もし我女をまゐらせて、よし寵幸あつからむも、閑院の女御の如く、他の嫉妬によりて、あさましき目にあはむかと、それに思ひ絶えたるならむとの意を、ふくめいへる也。村上帝の事は、月宴の卷(九ノ)によろづになさけあり、ものゝはえおはしまし、そこらの女御御息所、まゐりあつまり給へるを、時あるも時なきも、おほむ志の程こよげなれど、いさゝか耻がましげに、いとほしげにもてなしなどもせさせ給はず、なのめになさけありて、めでたうおぼしめしわたして、なだらかに、おきてさせ給へれば、この女御御息所たちの、おほむなかも、いとめやすく、ひむなき事きこえず云々、とあるをひへるなり。

一條(爲光)の大納言は、母もおはせぬ姫君(祇子)を、我御ふところにて、おほしたて奉り給へれば、萬いとつゝましき世の御心もちひなれば、つゝましう思しながら、今の御門(花山)の御をち義懷中納言(義懷)は、かの一條大納言(爲光)のおほい君の御をこにて、物し給ひければ、それをたよりにて、常に中納言をせめさせ給ふなりけり。さてやう〳〵思ほし立つなるべし。猶式部卿(爲平)の宮の女御(婉子)ぞ、ときめかせ給ふ。大殿(頼忠)の女御(諟子)、初よりなのめにて、なか〳〵さまよくおはします。一月に四夜五夜の御このゐは、絶えず同じやうなり。』

○母もおはせぬ云々』祇子の御母は、佐理の女なるよし、下に見えたり。大鏡爲光公の傳に、女二所は、佐理の兵部卿の御妹のはらとあり。○いとつゝましき云々』思しながらより、直に下の、さ

師輔
伊尹
義懷
懷子
花山院
爲光
おほい君
義懷室
祇子
花山女御

父の下の字活本になし印屋信本に從ひつ

てやう〳〵につづく文脈なり。すべて、世の中にもまじらはず、ひかへめがちなる心がけなれば、入内の勅命あれど、すがやかには、おもひ立たず、さしひかへ慎めるさまに、思しながら、やう〳〵入内の事を、決心せりと也。○義懷中納言』誰德公伊尹の子にて、花山帝の御母贈皇太后懷子の御兄弟なり。公卿補任に、寛和元年、非參議正三位藤義懷、右中將、九月十四日任參木、十一月廿二日從二位、主基國司、十二月廿七日、任權中納言とあり。○おほい君』暦花抄に、おほい君は、嫡女也と見え、本書初花の卷に、おほい君は、ただ今は十七八ばかりにて、又中姫君十五六ばかりにて云々などあり。をとこは、夫にて、和名抄に、夫、乎布度、一云乎度古とあり。さて、爲光の長女の、義懷中納言の北の方となれるよしは、尊卑分脈、大鏡等に見えたり。○それをたより』其内縁を手づるにして、中納言義懷に、祇子入内の事を、催促したまふとなり。尚上欄の系圖を見て、其關係を知るべし。○猶式部卿の宮の女御云々』婉子女御の寵幸せられし事は、上にも見えたり。

○初よりなのめにて』入内の時にかはらず、よの常のさまにて、却て樣子(祇子)よくおはすとなり。

かゝる程に、一條(爲光)の大納言の御姫君(祇子)まだて參らせ給ふ。この姫君は、小野(實資)の宮のおとゞ清愼公の御太郎、敦敏の少將の御女の腹に、男君女君ことおほしけるなり。手かきのすけまさの兵部卿の御妹の君の御腹なりけり。父の殿は、九條(師輔)殿の九郎君、爲光ときこゆ。何れも劣り勝るこ聞ゆべきにもあらず。誰かは其けぢめのこよなかりける。いとおごろ〳〵しきまでにて、參らせ給へり。弘徽殿にすませ給ふ。すべ

もろ人原本にもろ〳〵さあり眞中本に據り改めつゝ●御下なしの字原本に據て西本に據て補ひつ

のろ〳〵しき爲本にをかしきさあり

てこれはもろ人にまさりて、いみじう時めき給へば。大納言(爲光)いみじう嬉しう思して、いとど御いのりをせさせ給ふ。又いかにとも思し歎くべし。いとあまりさま惡しき御おぼえにて、數多の月日も過ぎもていけば、かたへの御方々、いとさまあしう、「かゝる事は、今も昔も、更に聞えぬことなり、久しからぬものなり」など、聞きにくゝのろ〳〵しき事ども多かり。』

○去たてゝ參らゝせ給ふ』日本紀略に、永觀二年十月十八日甲午、大納言藤原朝臣爲光卿女祇子、入掖庭、十一月七日癸丑、宣旨以大納言藤原爲光卿第二女祇子、爲女御者、以弘徽殿爲休所とあり。○この姫君は云々』此姫君祇子の母は、小野宮實頼の子なる敦敏の女にて、佐理の妹なりと也。○てかき』能書家をいふ。大鏡にも、敦敏の少將の男子佐理の大貳、世のてかきと見え、江談抄、才葉抄入木抄にも見えたり。○何れも劣り勝ると云々』女御たち、何れも其筋目に、劣り勝りのありと、申すべきにあらずと也。○誰かは云々』何れか。筋目の甚しく勝る事あらむ。其區別はあらじとなり。こも前の句と同じ心なるを、詞をかへて、書きつづけたるにて、其例多し。○おぞろ〳〵しき』入内の儀の、驚くばかり花やかなるよしなり。○弘徽殿』月宴の卷(○上ノ二)に註せり。○もろ人にまさりて』あまたおはします女御たちにも增りて、甚しく寵幸ありとの意。○いとど御いのり云々』今は寵遇あつきも、こは一時にて、遂には閑院の女御の如く、寵衰へなむ事を愛ひて、神佛に祈願し給ふとなり。○又いかにとも云々』又寵愛あつきにつきては、閑院の女御の如く、他の嫉

はかなき眞大本にわりなきさあり

給はざりつる爲本にかくなおぼしいづるにかくてさあり爲本に思しなげきてさあり●萬の下にの字原本になし屋本によりて補ひつ

妬をうけて、あさましき目にあはむかと、心配しなげくべしとなり。○あまりさまあしき云々』あまり見にくきまで、寵愛ありしをいふ。○かたへの御方々』他の女御達をいふ。○のろ〳〵しき』咀々しき意なるよしいへる說あれど、平治物語に、前代未聞のふしぎかなどて、のろ〳〵しげに、はばかるところなく、くどきたまへばとあれば、遲鈍なるを、のろしといへる、其詞を重ねたるにて、おろかめきたる意なるべし。

かゝるほどに、ただならずならせ給ひにけり。いといみじうはかなき御くだものも、安くも聞し召さず。唯(花山)まづ〳〵弘徽殿(祇子)に」このみたまはすれば、御おぼえめでたけれど、大納言(爲光)も、かたはら痛きまで思しけり。三月にて、奏していで給はんとするに、萬にとどめ聞え給ひて、五月ばかりにてぞ、出でさせ給ふ。萬御つゝしみも、御里にて、心安くと思すに、今まで出でさせ給はざりつるに、かく出でさせ給ひて、手を分ちて、萬にせさせ給ふ。初は御つはりとて、ものも聞しめざりけるに、月頃すぐれど、同じやうに、つゆ物聞し召さで、いみじうやせほそらせ給ふ。いみじきわざに思して、萬に手惑ひ、去のこすことなく祈らせ給ふに、橘ひとつも聞し召して、は御身にもとどめず、あさましう哀に、心ぼそげにのみ見えさせ給へば、父殿(爲光)の、胸ふたがりては、安からずうち歎きつゝ、あつかひ聞え給ふ。』

○はかなきくだもの』和名抄に、果蓏、唐韵云、説文、木上日果、古火反、宇亦作菓、日本紀私記云、古能美、俗云久多毛乃とあり。かりそめなるいさゝかの菓物にても、花山帝は、たやすく聞しめさずして、まづ弘徽殿の女御に賜ふべしとのみ、仰せ給へりとなり。○かたはら痛さまで云々』かたはらいたきは、類聚名物考に、傍痛、さしむけたるその當人にはあらぬ、傍に有人だに、たへがたくいたく苦しきをいふ。今昔物語の古本に、傍痛と書るぞ、よくあたれる云々、源氏物語の抄物に、をかしき事にも、笑止なる事にもいふ詞なり、所によりて、意かはれりといへりとあり。父大納言は、よろこぶべきなれど、わまりなる帝のありさまなれば、たへがたく、心ぐるしき事に思へりとなり、○三月にて奏して云々』懐姙の後、三月目に奏聞して、里方爲光の第に退出し給はむとするに、御門強て止め給ひしにより て、五月目に退出し給へりとなり。○萬御つゝしみも云々』御里にてより、手をわかちてにつづく文脈なり。さて御産につきて、御つゝしみ、何くれのことども、里方にて、心安くせまほしと思すに、退出の期二ヶ月延びたれば、人々手をわかちて、御祈何やかと、萬に玄給へりとなり。○御つばりとて云々』つはりとは、和名抄に、辨色立成云、擇食、豆波利、楊氏説同、狩谷氏の箋註に、按千金方求子部、白薇圓方後云、三月正擇食時、可食牛肝及心、至四月五月不須、萬安方引大全良方云、惡阻病、俗呼撰飯、唯思酸辛之味也、病源候論姙娠惡阻候云、惡阻者、心中憒悶頭眩、四支煩疼懈惰、不欲執作、惡聞食氣、欲噉鹹酸果實、多睡少起、世云惡食、又曰惡字是也、及至三四月日以上、大劇者、不能自勝舉也、亦即是云々、又新撰字鏡に、菜桑始反肉也 豆波利乃登支と見え、落窪物語、萬葉集、散木集などにも見えたり。○手惑ひ云々』いかにせむかと、まどひさわぎ、あらゆる祈のわざを行ひて、神佛に祈願し給ふとなり。○胸ふたがり』胸ひらくの反對にて、氣のつまるをいふ。○あつかひ』せわするをいふ。

しげさの下に の字原本になし 西眞本によりて補ひつ

内よりも、御修法數多せさせ給ふ。内藏づかさより、萬の物をもてはこばせ給ふ。よる夜中わかぬ御使のあげさに、殿上人、藏人も、あまりにわびにたり。暫しもこゝここほるをば、御簡を削らせ給ふ。御かしこまりなど、さまざまおごろ〳〵しければ、さても、六位の藏人などは、いとよしや。さるべき殿原の君達などは、いと堪へ難きことに思ふべし』はかなき御菓物(爲光)なども、かしこには、つゆかひなうきこしめされゝど、まづ〳〵と奉らせ給ふを、大納言(爲光)「いと世づかずや」など、うち歎きつゝ、過し給ふほどに、せめておぼつかなく、戀しく思ひ聞え給ひて、「唯宵のほど」このみのたまはすれど、え思したゝぬに、女御(祇子)もさすがにおぼつかなげに、思ひ聞えさせ給へれば、大納言殿、唯一日二日と思し立ちて、參らせ奉り給ふ。

○内藏づかさ』例の内藏寮にて、御修法の具どもを、持ちはこぶなり。○よる夜中わかぬ云々』夜中深更のわかちなく、女御の病をとはせ給ふ御使、隙なしとなり。○藏人』職原抄に、藏人所、嵯峨天皇御宇、弘仁年中初置之、摸異朝侍中内侍等職歟云々、弘仁以往、少納言及侍從爲近習宣傳之職、正五位中、又撰補三人、六位中又撰補四人、謂之職事、凡殿上事、頭以下、職事所奉行也云々

とあり。○あまりにわびたり』甚しく難儀に思へりとの意。○暫しもとどこほるをば云々』少しにても、ひまどりたるをは、殿上のふだを除き給へりと也。宇津保物語國讓の卷にも、藏人御かへりもてまゐらずは、ふだけづらむと、仰せられつるものを云々とあり。○御簡を云々』殿上日給の簡を除かるゝにて、これを除籍といふ。禁秘抄に、除籍、侍臣等有罪過之時、及除籍、頭藏人承仰、仰藏人、藏人削簡、藏人非藏人同之、殿上受領、在彼簡同削之とあり。日給簡とは、同書清涼殿殿上の條に、簡、有袋朱辛櫃、入簡と見え、日中行事に、日給の事あり。袋にいれたる簡をとり出して、もとのまゝに、辛櫃のそばにたつ、袋はたゝみて、簡のえたにして、簡の三段に名の下におしたる紙を、放紙といふ、其紙に、名の下に、まゐりたるものをば、日をかく、午とも未ともかくなり、宿したるをば、其傍に夕とかく、藏人これをつとむるなり云々、毎月一日は、藏人殿上の簡の放紙おしかへて、古き放紙のすゑ、折かへしたるをのべて、人々の上日の數をかく、三日前に奏するなりとあり。なほ侍中群要にも、詳に見えたり。○御かしこまり』即ち勅勘、召籠などをいふ。和訓栞に、物に、かしこまりにて、こもりゐなど見えたるは、御勘氣の意にいへりとあり。禁秘抄に、勅勘、無風情、不見天氣、閉門之外無他、召籠事、侍臣以下、有咎之時召籠、或令候殿上、藏人頭召籠、非普通事歟云々、近代、地下者召籠陣、殿上人者只候禁中也、藏人者或召籠横敷、藏人頭私召籠恒事也、又瀧口所衆等、或召籠御所中、或召籠殿上口、片時不許、殊重時也、召籠人、不從御膳、不參御前とあり。○六位の藏人』職原抄に、六位藏人四人、重代諸大夫中、不放埒有器量之輩補之、地下諸大夫、多以之爲先途云々、六位藏人、奉行禁中細々公事、朝夕御膳等事、稱之日下蔭也、四人分日、令奉行故也、六位職事、又聽禁色、至極蔭者、著麹塵袍、是申下御服之儀也、晴時、雖下蔭著之、第二蔭稱之差次、第四稱之新藏人也とあり。さて地下の諸大夫などなれば、さまで苦しとも思はず、當然の事なりとの意なり。○さるべき殿原』然るべき家筋にて、公卿になるべき家の君達は、かゝる煩務に馴れざれば、堪へがたき事に思へりとなり。○はかなさ御菓物云々』こは上にある文と同じ意也。かしこには、女御の御方をいふ。○つゆかひなう』御門より賜はるかひもなく、少しも食べたまはぬとなり。○まづ〳〵云々』御門より、女御に下し賜はるをいふ。○世づかず』御門の御さまの、物ぐるほしく、ひとゝはりならぬをいふ。やは、歎き辭なり。○せめておぼつかなく云々』花山帝のおぼすさまなり、せめては、切にの意にて、女御の里におはしますを、いかがあらむと、不安心に、戀しく思しめされて、ただ宵の程のみにても、入内せさせよと、切に勅命あれど、父大納言は、女御の御容子の、やせほそり給へるを見ては、入内の事をためらひをりしに、女御もさすがに、御門の御心を察し奉りて、まゐらぬもいかがと、心もとなげに申し給ひしかば、父爲光も、唯一兩日の間にて、退出あるべしと思ひ定めて、入内せしめたりとなり。

弘徽殿に參らせ給ふとて、御あつらひなどいふことを、かたへの御方々の口よからぬ人々、ゆゝしういまゝしきことゝ聞ゆ。かくて參らせ給へれば、あはれに嬉しう思し召して、夜晝やがておものにもつかせ給はで、入り臥させ給へり。あさましう物ぐるほしとまで、内のわたりには申しあへり。女御は參らせ給へりし折の

つはれの下にしの字原本になし爲西より補ひつ眞本に●折のやうに原本に折に爲柳本にもさしもか折よりも

やうにもあらず、かくただならずならせ給ひて後は、内におはしまし〻折よりも、こよなくほそらせ給へりしを、まいてこの度は、その人こ見えさせ給はず、あさましうならせ給へり。いこされをかしうおはせし人ども覺えず、いみじうあめらせ給ひて、唯あべいにもあらぬなげきをのみせさせ給へば、上も泣きみ笑ひみ、涙にあづませ給へり。いみじう哀に悲しき御事ども なり。

○おつらひ『弘徽殿の修繕をいふ。○かたへの御方々の云々』例の口よからず、はらわろき女御達は、嫉妬のあまりに、弘徽殿の御しつらひを、甚しくにくゝ、腹だたしき事に申さるとなり。○おはれ嬉しう云々』御門の御さまなり。○おもの』御膳なり。雅言集覽に、食物(クヒモノ)の略にて、をものとかくべきよしいへり。○ものぐるほし』狂氣のさまをいふ。○内のわたり』宮中にては、花山帝の御樣子を見て、あさましう狂氣のさまにおはすとまで、とりさたしたりとなり。○參らせ給へりし折云々』始て入内し給へりし時とは、打かはりたる御樣子なりとの意也。○内におはしまし〻』退出し給はぬ以前、宮中におはしまし〻時よりも、甚しく痩せ細らせ給へりとなり。○まいてこの度は云々』この度入内し給ひて後は、衰弱し給ひて、女御其人とは見えぬまでに、やせほそらせ給へりとなり。○ざれをかしう云々』初は、洒落におもしろき御樣子にておはしたれど、今は、さやうなる人とも思はれず、甚しく打しをれ給ひて、ただ心ぼそさに、なげきかなしみ給へりとなり。○泣きみ笑ひみ』俗言に、泣いて見たり、笑つて見たりといふ意なり。女御の參内をよろこびもし、

唯ならずと云々 ぞじたり屋本によりて改めつ

許させ給ひて 十九字原本に下なし諸本によりて補ひつ

ばつ原本に出でくれば原本に出でければ 爲光大本により改めつ

あはれにの四字原本になし 榊本によりて補ひつ

且は、女御の御惱によりて、いたくおとろへ給へるを、かなしみ給ふよしなり。

さて三日ありて、出でさせ給ひなんこて、御迎の人々、御車などあれど、すべて許し聞えさせ給はで、今一夜々々と、留め奉らせ給へる程に、七八日になりぬれば、御つゝしみも、よそ〳〵にては、いこ後めたしこて、大納言(爲光)いこまめやかに奏し給へば、泣く〳〵御暇許させ給ひても、御てぐるまひき出でまかでさせ給ふまで、出で居させ給へり。大納言哀にかたじけなう思されて、我御面目もめでたくて、さまざま御涙も出でくれば、ゆゝしくて忍びさせ給ふ。なかなかわりなく思されて、上(花山)さへ例のやうにもおはしまさぬを、女房など、いこほしう聞えさす。一條殿の女御(祇子)は、月頃はさてもありつる御心ちに、こたみ出でさせ給ひて後は、すべて御ぐしも、あげさせ給はず。あさましう沈ませ給ひて、あはれに只時を待つばかりの御有樣なり。大納言、泣く〳〵萬に惑はせ給へど、かひなくて、姙ませ給ひて八月こいふにうせ給ひぬ。大納言殿の御有樣書き續けずこも思ひやるべし。

○三日ありて』入内の後、三日を經たれば、退出し給ふならむこて、一條殿より、御車をもて、御迎に參りたれどこなり。○御つゝしみ』御懷姙につきての、御養生、及び其謹愼をいふ。○よそ〳〵にて』よそめきたる禁中にては、里第こおなじからず、おのづから女御も、心安き所もなしこてこ

也。○哀にかたじけなう』御門の御樣子の、女御を戀ひ給へるを、あはれに勿体なき事と思ひ、且は、我面目になれば、嬉しさと、悲しさと、かたじけなさと打ちまじりて、いろ〳〵の御涙も、いでたりとなり。○なか〳〵』花山帝は、女御を、去ひて退出せさせ奉れる事を、却てあまりに、甚しき事と、思しめされて、女御のかゝる御さまなる上に、御門さへ御こゝろあしくおはしますを、女房なども、いとほしく、あはれなる事に、申し奉れりとなり。○さてもありつる御こゝちに』そのまゝにて、おはしつべき御惱なるにとなり。○御ぐしも云々』御頭ももちあげ給はず、ふししづみ給ひて、ただ死期をまち給ふばかりの、御あり樣なりとなり。○八月といふに云々』大鏡にも、御子はらませ給ひて、八月うせ給ひにきと見え、日本紀略に、寛和元年七月十八日辛酉未刻、女御藤原祇子卒、大納言爲光卿女也、懷孕之間、日來病惱、天下哀之、件喪家、前播磨守藤原共政、室町西泰日北宅地也とあり。

花山 内にも、たれこめておはしまして、御聲も惜ませ給はず、いとさまあしきまでなかせ給ふ。御乳母達、制し聞えさすれど、聞し召し入れず。哀にいみじ。一條殿には、さてのみやはとて、例の作法のことども、あたゝめ聞え給ふも、あさましう心うし。

爲光詞 「ゐて出で奉りて、御輿にて、出し入り奉りて見奉らんこそ思ひしか、かくやは」と、伏しまろび泣かせ給ふ。花山 内には、さべき御心よせの殿上人、上達部のむつまじきかぎりは、皆かの御送に出し立てさせ給ふ。我よそに聞くここの悲しさを、かへす

がへす思し惑はせたまふ。夜一夜御殿ごもらで、思しやらせ給ふ、』

○たれこめて』帳すだれなど垂れかけて、内にこもるをいふ。御惱にて、こもりおはしますとなり。古今集に、こゝちそこなひて、わづらひける時に、風にあたらじとて、おろしこめてのみ待りける あひだに、をれる櫻の、ちりがたになれりけるを見てよめる、藤原よるかの朝臣、「たれこめて春のゆくへもしらぬまにまちし櫻はうつろひにけり」とあるにおなじ。○いとさまあしき云々』見苦しき程の御樣子にて、泣き給ふとなり。○御乳母達』花山帝の御乳母なり。○一條殿』女御の里第なり。○例の作法』御葬送の事をいふ。去たゝむはとりまかなふをいふ。○ゐて出で云々』はじめ御懷妊によりて、里第に幸て退出し奉るときには、やがて皇子を產ませて、この女御をば、皇后にたて奉り、御輿に乘せ奉りて、宮門の出入せさせて、それを見奉らむと、たのしく思ひをりしに、かくあさましき事とは、思ひかけざりきとなり。かくやはの、やはは反語にて、下に思ひかけきなどの文を省きたり。○御輿』鳳輦をいふ。屋形車の輪なくして、舁きゆくものにて、其上に、金鳳をたてゝ飾となせり。其さまは、輿車圖考に詳なり。さて、御輿は、中右記嘉承二年閏十月九日の條に、我朝、帝王、皇后、齋王之外、無乘輿人云々、輿車圖考に、天子は、至尊におはしませば、車には乘御せず、また、輿は殊に重くせらるゝものにて、天子の外には、皇后と齋王とに限れりとあり。されば、后になし奉りて、御輿して、出入り奉りといへる也。○御心よせの云々』心を寄すにて、負負にする意なり。さて、御門は、ひいきにしたまふ上達部、殿上人の、親昵なるには、悉く出立

雲霧爲梓本に雲霞とあり

たしめて、女御の御葬送に、供奉せしめられたりとなり。○我よそに云々』御門の御さまなり。女御のうせ給ひぬるを、聞き給ふのみにて、今一目にても、見む事のかなはぬ悲しさを、かへすがへす思しなげかせ給ふとなり。○夜一夜』終夜の意。

大納言(爲光)殿は、御車のあとにあゆませ給ふも、唯たふれ惑ひ給ふさまいみじ。はてはなう雲霧にてやませ給ひぬ。内にも外にも、あないみじ悲しとのみ、思し惑ふ程に、はかなう月日も過ぎもて行きて、さべき御佛經のいそぎにつけても、御涙ひるまなし。内にもこの御忌のほどは、絶えていづれの御方々も、つゆまうのぼらせ給はず。宮(爲平親王)の女御(媛子)をば、さやうになど聞えさせ給ふ折あれど、御心ち惱しなどのたまはせつゝ、のぼらせ給はず。

○御車のあとり』女御の御櫬を載せたる御車の後の意也。○雲霧にて云々』火葬の烟の、雲霧の如く立ちのぼりて、きえうせ給へりとなり。○さべき御佛經』女御御追福のために、然るべき佛經を書寫して、供養するよしにて、いそぎは、御支度をいふ。こは、日本紀略に、閏八月二日癸卯、大納言爲光卿、爲故女御、於法性寺修法事、遣右近少將源惟賢、被修諷修と見え、本朝文粹に、慶保胤がものせる、爲大納言藤原卿息女御四十九日願文に、我老身忘寢食、及于忌辰、奉圖繪法華蔓荼羅一鋪、奉書寫金字妙法蓮華經一部八卷、開結阿彌陀般若心經等各一卷、便於法性寺、敬以奉供云々と

あるをいふ。○この御忌』四十九日の御忌中をいふ。○さやうになど云々』まうのぼらせ給ふべきよし、申させ給ふとなり。

かくあはれ〳〵なごありしほどに、はかなく寛和三年にもなりぬ。世の中、正月より心のどかならず。怪しうものゝさとしなどあげうて、内(花山)にも御物忌がちにておはします。又いかなるころにかあらん、世の中の人、いみじく道心起して、尼法師になりはてぬとのみ聞ゆ。これを御門(花山)聞し召して、はかなき世を思し歎かせ給ひて、「あはれ弘徽殿(媛子)、いかに罪深からん、かゝる人は、いと罪重くこそあめれ、いかでかの罪をほろぼさばや」と、思し亂るゝ事ども、御心(想)の中にあるべし。この御心の、怪しう尊き折多く、心のどかならぬ御氣色を、太政大臣(義懷)思しなげき、御をぢの中納言も、人知れず、唯胸つぶれてのみ思さるべし。說經を、常に、花山の嚴久阿闍梨召しつゝ、せさせ給ふ。

○心のどかならず』世上の靜ならぬをいふ。○怪しう云々』怪異などしきりにあらはれて、災異さては、世の變動の兆候あるべきよし、天よりさとし知らしむとなり。この寛和二年の春には、太政官の正廳に虹見はれ、同廊屋に鶴とびあつまり、校書殿に鶯集りたるをもて、有名なる安部晴明に占はせたる事、本朝世紀、日本紀略などに見えたり、○御物忌』月宴卷に(上ノ一〇)に註せり。○いかな

あめれ原本にあなれとあり給本によりて改めつ

御をぢの下の の字原本になし給小本によ補ひつ

るころにかあらむ云々』これより、御門御出家の事をかけり。いかなる頃にかは、それと月日をさゝず、おぼらかにいへるなり。こは、正月一日一品資子内親王、三月十四日有明親王の北方藤原曉子、同月廿一日左馬權頭邦明、同月廿五日大納言朝光の男侍藤原相中等出家せるよし、日本紀略、本朝世紀に見えたるなどをいへるにや。○はかなき世』定めなく、かりそめなる世をいふ。○あはれ云々』御門の思しめすさまにて、あはれは、歎息の辭なり。○かゝる人は云々』弘徽殿の女御は、懐姙のまゝ、かくれさせ給へば、最罪障重かるべしとなり。○いかで云々』何とかして、女御の罪障を、消滅させなむものと、思し煩ひ給ふことの、御心の中にあるべしとにて、それといはねど、御出家の志ましますを、含めいへるなり。○この御心』すなはち、道心にて、其尊き事を、思はせ給ふ事のみ多く、御心のおちゐ給はぬを、頼忠、義懐等、うれひなげきたりとなり。○説經』佛經の趣意を講説するをいふ。○花山』拾遺抄に、花山は、山階にあり、元慶寺といふ御寺たてられたりとあり。元慶寺は、山城名勝志宇治郡の條に、今北山村、從道北堂遺殘、號元慶寺とあり。○殿久阿闍梨』花山大僧都といへり。系圖詳ならねど、御門花山寺に遁れ給へるときは、道兼と共に供奉せるよし、扶桑略記、百錬抄、帝王編年記等に見えたれば、兼家の委托によりて、御門をそゝのかし奉りしにはあらじか。阿闍梨は、梵語なり。僧の稱號にて、師となるべきものをいふ。翻譯名義集に、闍梨、或阿祇利寄歸傳云、梵語阿遮梨耶、唐言軌範、今稱闍梨訛略、菩提資糧論云、阿遮

つかはせ原本につかせとあり給大小本により改めつ

おはしませば原本におはしますはとあり語本に據て改めつ

御心の中の道心かぎりなくおはします。『妻子珍寶及王位』といふことを、御口のはにかけさせ給へるも、惟成の辨、いみじうらうたきものにつかはせ給ふも、中納言義懐もろともに、「この御道心こそうしろめたけれ、出家入道も、皆例のことなれど、これは、いかにぞやある御心ざまの、をり〳〵出でくるは、ことごとならじ、唯冷泉院の御物氣の、せさせ給ふなるべし」など、歎き申し渡る程に、猶怪しう例ならず、物のすずろはしげにのみおはしませば、中納言義懐なども、御このゐがちに仕う奉り給ふほどに、寛和二年六月二十二日の夜、にはかにうせさせ給ひぬとのゝしる。

○御心の中の云々』花山帝の御さまなり。○妻子珍寶及王位』大集經十四、虚空藏菩薩所問品に、妻子珍寶、及王位、臨命終時不隨者、唯戒及施不放逸、今世後世爲伴侶とあり。古今著聞集に、御歎き淺からず、世の中心ぼそく思しみだれたりける頃、粟田關白、いまだ殿上人にて、藏人辨と申しけるが、扇に、妻子珍寶、及王位、臨命終時不隨者と云文をかきて、もたれりけるを、御覽せられけるよりこそ、いとゞ御心起りにけれとあり。○御口のはに云々』口の端にて、言葉にいひ顯はし給ひぬとなり。狹衣に、此頃、わらわべの口のはにかけたる、あやしの今樣どもを云々などあり。○惟成の辨』藤原魚名の裔にて、右少辨雅材の子、母は攝津守中正の女也。辨とは、辨官なり。○らうたきもの』雅語譯解に、カハユラシイ、ムゴタラシイ、勞いたし歎とあり。さて、かはゆらし

きものに思して、召し仕はせ給へりとなり。○この御道心云々』花山帝のおこさせ給へる道心は、心もとなき事なり。出家して佛門に入るは、あまた例ある事なれど、花山帝のは、それとはかはれるさまにて、いかにぞやと、打がたぶかるゝなり。かく時々道心の起り給ふは、別事にあらず、こはまたく、冷泉院の御物氣の、去給ふ故なるべしとなり。冷泉院の御もの、けの事は、月宴の卷にあり。○物のすずろはし』物もおぼえ給はぬさまなり。○うせさせ給ひぬと云々』本朝世紀に、寛和二年六月廿三日庚申、今曉夜丑刻許、天皇密々出清涼殿、忽以縫殿陣有車、左少辨藤原朝臣道兼、輿竊出、相共同車、御東山花山寺、出家入道とあり。なほ扶桑略記、百錬抄、大鏡などにも見えたれば、參考すべし。

内のそこらの殿上人、上達部、あやしの衛士仕丁にいたるまで、殘る所なく、火をともして、到らぬくまなくもこめ奉るに、ゆめにおはしまさず。太政大臣（報忠）よりはじめ、諸卿殿上人殘らず參り集りて、つぼ〳〵をさへ見奉るに、いづこにかおはしまさん。あさましういみじうて、一天下こぞりて、夜の中に、せき〳〵固め騷ぎのゝしる中納言（スクヨシ）は、守宮神賢所の御前にて、伏しまろび給ひて、「我寶の君は、いづこにあからめせさせ給へるぞや」と、伏しまろび泣き給ふ。

○内のそこらの云々』禁中なる、あまたの上達部、殿上人をいふ。○あやしの衛士仕丁云々』あやしは、いやしき意なり。衛士は、衛門府に屬する兵士なり。軍防令に、凡兵士向京者名衛士と見え、

さもしの下て
宇給本にな
し○せき〳〵
かため原本に
なきゝさあ
り諸本によ
て改めつつ傍
本に山々卿々し
かたにめのゝ
るさあり○守
宮神榊本に
べ神さあり

延喜衛門式に、凡宮城門者、並令衛士衛云々、また其宮門、皆令衛士炬火など見えたり。仕丁は、貞丈雜記に、仕丁と云は、めしつかひの者の事也、家來と云に同じとあり。○ゆめに云々』ゆめ〳〵翁はしまさずとなり。ゆめにの事、上に註せり。○諸卿』公卿をいふ。○つぼ〳〵』壺々なり。壺とは、内庭にて、殿中の庭、垣の中の庭など、一區のつぼまりたる處をいふ。○せき〳〵固め云々』固關にて、名目抄に、有天下吉凶之事時、固三關、會坂、鈴鹿、不破とあり。○守宮神』外記廳に祭れる神なり。山槐記に、外記廳主君神、新抄に、結政守君神（結政は外記廳の中なり）、兼敦卿記に、外記廳守宮神など見えたり。外記廳と、賢所とは、建春宜陽の二門を隔つるのみにて、いと近き程なり。矢野玄道翁の續古事談私記に、守宮神、案見榮花物語、蓋本稱屋船神邪、或以爲内侍所者謬といへるは、守宮神賢所の御前とあるによりて、本書を解きあやまりたるなり。こは、守宮神、及び賢所の意なれば、思ひまがふべからず。さて、この神は、兼敦卿記にも、古語拾遺を引きて、神祇官八神殿之中なる、大宮賣神なるよしいへり。されど、續古事談に、典藥頭丹波雅忠、守宮神の夢の告によりて、燒亡の際、文書一卷も燒かざりし事見えて、昔は、諸道ニ、カク守宮神タチソヒケレバ、シルシモ冥加モアリケルニコソとあれば、わざはひをかねて告げ給ふ神なるべし。大方便佛報恩經に、守宮殿神、波羅奈國王羅閦王に、羅暇大臣の反逆を告げし事を記せる、守宮殿神も同じさま也。又貞丈答の安齋隨筆には、按、守宮神は、みやもりの神とよむべし。賢所をさして云なるべし。ただに賢所といひてもあるべきを、守宮神賢所とつづけていひたるは、その時宮中を尋ねさがし奉る時なれば、守宮神の三字を、賢所の上にかがふらせしならん。賢所は、廣く天下を守り給ふなれば、宮

中におはしますからに、宮中を守り給はん事は、いふにや及ぶ。守宮神と賢所を、二つになすはよろしからぬ歟どいへり。又按ずるに、守宮神を賢所とならべあげたるは、いとあやしきこゝちすれば、或は、榊原本に、すべ神とあるぞ正しくて、皇祖神を祭れる、賢所の御前にての意にはあらじか。さるは、すべのべを、縱ざまにかさあやまりて、すく神とよめるを、たま〳〵守宮神といふがあるをもて、其神の事としたるならむか。なほ後の考を俟つになむ。○賢所』三種の神器の中なる、神鏡を奉安せる所にて、溫明殿の中にあり。賢所とは畏敬すべき所の意にて、內侍の女官等、守護し奉れるによりて、又內侍所ともいへり。なほ此事は、禁秘抄、古今著聞集にも見えたり。さて、賢所は、帝王の御先祖、天照太神を祭り給へる所、守宮神は、わざはひを告ぐる神なれば、しか祈願せるならむ。○我寶の君』大事と思ひ奉る主君の意にて、落窪物語に、衛門が思ひしがきりの事をせさせ給へば、げにおまへより、寶の君となむ思ひ奉ると見え、大鏡にも、なほ我寶の君に、おくれ奉りしやうにも、かなしく思ひやらるゝ折こそ、侍らねなどあり。○あからめせさせ給へる』思ひかけず、俄にうせ給ひへりとの意にて、ぞやは、問ひかくる辭なり。さて、あからめは、歷朝詔詞解に、景行紀に、不意之間、倏亡我子(アカラヤスアコ)とあり、こゝも此意にて、思ひかけず、俄なる意なり。神武紀に、倏忽之間(アカラサマ)、出其不意、雄略紀に、噴猪從草中暴出(アカラサマニ)、また取急歸家(アカラサマニ)、皇極紀に、急(アカラサマ)などあり。中昔の物語書などに、あからさまに罷出などあるも、俄にふと、いさゝか物する事なり、さて、しばしも目をはなたぬ事を、あからめせずといふも、俄にふといさゝか、他へ目をうつすを、あからめすといふなりとあり。

目もつづらかな
檢小本にめづ
らかなるとあ
り●法師の下
印本に○の字
なし活本にの
ひつし従

山々寺々に手をわかちて、もとめ奉るに、更におはしまさず。女御達涙を流し給ふ。あないみじと思ひ歎き思ふほどに、夏の夜もはかなく明けて、中納言(義懷)や、惟成の辨など、花山に尋ね參りにけり。そこに、目もつづらかなる小法師にて、ついゐさせ給へるものか。『あな悲しや、いみじやと、そこに伏しまろびて、中納言(義懷)も、法師になり給ひぬ。惟成の辨もなり思ひぬ。あさましうゆゝしう、哀に悲しとは、これより外のことあべきにあらず。かの御ことぐさの「妻子珍寶及王位」も、かく思しとりたるなりけりと見えさせ給ふ。さても法師にならせ給ふはいとよしや、いかで花山まで、道を知らせ給ひて、かちよりおはしましけんと見奉るに、あさましう悲しう、哀にゆゝしくなん見奉りける。』

○花山』山階なる元慶寺なり。○そこに云々』花山帝の御さまなり。○めもつづらかなる』つぶらかに同じく、目を圓く張るをいふ。新撰字鏡に、盱(張目視、憂也、目豆々良加爾須)とあり。○つゐゐ』急居にて、うづくまり居給ふをいふ。ものかは、驚きあきれたる時の詞にて、かは、かなと同じく、歎辭なり。○中納言も云々』日本紀略に、寛和二年六月廿四日辛酉、權中納言從三位藤原朝臣義懷入道、同日權左中辨正五位左衛門權佐藤原朝臣惟成出家、先帝藏人侍讀也と見え、愚管抄に、さて花山といふは、元慶寺にて、御ぐしおろされければ云々、此事を聞きて、中納言義懷、左中辨惟成は、やがて、花山にまゐりて、すなはち出家して、此二人は、聊のさずなく、佛道に人となりにけりとあり。○御

御孫にこそその下はの原本になし中本によりて補ひつ

兼家
超子
三條
詮子
一條

ことぐさ』言のはぐさにて、俗語の、口グセといふに同じ。○かくおぼしとりたる』出家して、佛門に入るべき意なりと、會とくし給へるなりとなり。○いとよしや』誠に、よき事かなの意也。○いかで花山まで云々』花山までの道を、いかにして知り給ひけむ。案内者なくては、えおはしまさじと、わざと疑をいれて、暗に、粟田の道兼、其父兼家と謀をあはせて、そゝのかし出し奉れるよしを、下にこめたるなり。そは、大鏡、愚管抄、十訓抄、著聞集などに見えたり。

かくて二十三日に、東宮(一條)位につかせ給ひぬ。東宮には、冷泉院の二宮(三條)居させ給ひぬ。御門(一條)は、御年七にならせ給ふ。春宮(三條)は十一にぞおはしける。春宮(三條)も、この東三條(兼家)の大臣の御孫にこそはおはしませ。いみじうめでたきことかぎりなし。これ皆あべいことなり。』

○二十三日に云々』日本紀略に、寛和二年六月廿三日庚申、花山天皇偸出禁中、奉劒璽於新皇、年七外祖右大臣(兼家)參入、令固禁内、警備、翌日行先帝讓位之禮、右大臣藤原朝臣攝行萬機、如忠仁公故事とあり。○東宮には云々』同書に、七月十六日壬午、冷泉院第二居貞親王、於外祖攝政南院第加元服、年十一今日立親王、爲皇太子、即任坊官とあり。○東宮も云々』東宮の御母は、兼家の女超子なり。

さても、花山院は、三界の火宅を出でさせたまひて、四衢道のなかの露地に、おはしましあゆませ給ひつらん、御足のうらには、千幅輪の文おはしまして、御足の跡には、いろ〳〵の蓮ひらけ、御位上品上生にのぼらせ給はんは知らず。この世には、九重の宮の中の燈火消えて、たのみ仕う奉る男女は、暗き世に惑ひ、哀に悲しくなん。さても中納言(義懷)もそひ奉り給はず。飯室といふ所に、やがて籠り居給ひぬ。惟成入道は、聖よりもけに、めでたく行ひてあり。花山院は、御受戒、この冬こそ思しめしけるあさましきことども、次々の卷々にあるべし。』

卷々原本に卷とあり乃本によりて補ひつ

○花山院』御在所によりての、御追號なり。拾遺抄註に、花山は、山階にあり、元慶寺と云ふ寺を建てられたり、花山院は、彼寺に御幸ありて、御出家あり、仍號花山法皇、後に京に御座の御所を、花山院と號するなりとあり。○三界の火宅云々』以下、花山院は、俗界を出離し給ひて、尊とき佛門にいらせ給へるを、佛經をひきて、たゝへ奉れるなり。こは、法華經譬喩品に、爾時諸子、聞父所說、珍玩之物、適其願故、心各勇鋭、互相推排、競共馳走、爭出火宅、是時長者、見諸子等、安穩得出、皆於四衢道中、露地而坐、无礙碍、其心泰然、觀喜踊躍とあるをいふ。砂石集花山院御出家の條なる、覺鍛上人の詞にも、三界無安、猶如火宅、王宮モ猶、火ノ中ナリ、常有生老病死憂患、玉体モ又無常ノ形也トコソ、申サレケレと見えたり。○三界』欲界、色界、無色界をいふ。釋氏要覽に、界者何義、瑜珈論云、種性義、因義、住持義、婆沙論云、分段義、磐論云、趣義、俱舍論云種族義、因果不同、故有三焉、欲界、欲有四種、一情、二色、三食、四婬欲、以希須爲義、謂此界四欲

具足、故名欲界、色界、婆沙論云、有色可丁施設、故名色界、無色界、婆沙云、無色可丁施設、故、名無色云々とあり。○火宅』法華經七喩の一なる、火宅喩にて、長者の古宅火出しに、子供ら内にありて、出でやらぬを、父長者、羊車鹿車牛車にて、次に大白牛車にて、皆々引き援けたることを記せり。故に火宅といふ。法華文句に、火譬衆生五濁等、苦宅譬三界、謂三界衆生、爲五濁八苦之所煎逼、而不得安穩、猶大火被火、所燒而不能安居、故以火爲喩とあり。さて、三界火宅は、俗塵といふ意なるべし。拾遺和歌集に、題しらず、よみ人しらず、「世の中にうしのくるまのなかりせばおもひの家をいかでいでまし」とありて、火宅をおもひの家といへり。○四衢道』法華經の註に、苦集滅道の四諦なるよし見えたり。四諦は、法界次第に、此四道、言語者、諦以審實爲義云々、一苦諦、苦以逼惱爲義、一切有爲心行、常爲無常患累之所逼惱、故名爲苦云々、二集諦、集以招聚爲義、若心與結業相應、未來定能、招聚生死之苦、故名爲集云々、三滅諦、滅以爲滅無義、結業既盡、則無生死之患累、故名爲滅云々、四道諦、道以能通爲義、正道及助道、是二相扶能通、至涅槃とあり。○御足のうらには云々』遂には、佛果を得給ひて、其德は、釋迦佛にもたぐひ給ふべきよしを、佛經の文によりて、稱賛し奉れり。觀佛三昧海經觀四威儀品に、佛舉足時、足下千輻輪相、二輪相、皆雨八萬千四衆寶蓮華、又勝天王般若經二行品に、略證三十二相、八十種、好一足下、平滿二行步、平正三足下、輪相悉具、穀綱千輻莊嚴などありて、足千輻輪は、釋迦三十二相の中なるよし、諸乘法數に見えたり。上品上生は、極樂淨土にて、最高の位をいふ。さて、花山院は、十善の帝位をすて、出家したまへるによりて、得道して、つひに、上品上生にのぼらせ給ふべし、されど、それは、凡夫の知るべきにあらず。只この現世を、いかにし給はむとするにかとの意にて、下に、その御さまのいとあさましさよしを、恨み奉れる意を、ふくめたり。○このよ』現世をいふ。○宮の中の燈火さえて』俄に讓位し給ひしかば、宮中は、恰も燈火のきえたらむやうにて、花山帝を頼み奉りて、宮づかへせる、男女の人たちの、闇夜にまどひたる如きあり樣は、見るも哀に悲しとなり。○中納言も云々』花山にては、先帝の御傍に、中納言義懷も祗候せず、其中納言は、飯室に籠うたりとなり。飯室の上、其中納言はの、五字を加へて見るべし。○飯室』叡山横川の別所にて、寶滿寺といふ寺なり。中納言義懷の、そこにこもりて、行ひたるよし、大鏡、拾芥抄に見えたり。○聖よりもげに云々』法師の高德なるを、聖といふ。和訓栞に、物語などに見えたるは、名德の僧をさせり、今世にては、其眞似をする者の通稱となれりとあり。けには、勝りての意なり。さて、惟成の、今道心ながら、名德の僧よりも、優りて行ひすましたりとなり。○花山院は御受戒』次なる樣々の悅の卷に註せり。○次々の卷にあるべし』支那小說に、聽下回分解とあるに似て、この外、落くぼ物語一の卷の末にも、二の卷にぞ、ことごともあんべかめるとぞある、堤中納言物語せめつる姫君末に、いひ笑ひて歸ぬめり、二の卷に有るべし、などと見えたるも同じ。

榮華物語詳解卷一終

明治三十二年一月廿三日印刷
明治三十二年一月廿七日發行

定價金四拾錢

著者　和田英松
東京市本郷區湯島新花町百〇六番地

著者　佐藤球
東京市下谷區北稲荷町廿四番地

發行者　三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者　金崎金平
東京市京橋區南鍋町二丁目八番地

版權所有

發行所　明治書院
關西大賣捌所　東京市神田區錦町一丁目
大坂市東區備後町四丁目　吉岡平助

大賣捌所

東京日本橋區　林平次郎
同　水野慶次郎
同　長島文昌堂
同　小林喜右衛門
同　杉本七百丸
同　柳原友吉
同　大倉書店
同　松榮堂
同　青野友次郎
同　京橋區　目黑支店
同　服部書店
同　北隆館
同　松邑孫吉
同　文館
同　神田區　東京堂
同　中西屋書店
同　有斐閣
同　三省堂
同　上田屋支店
同　岡崎屋
同　金刺書店
同　渡邊書店
同　敬業社
同　萬卷堂
同　武藏屋
同　敬文堂
同　播磨屋
同　山內書店
同　屋志呂屋
同　本郷區　田中書店

東京本郷區　盛春堂
同　文學書房
同　牛込區　盛文堂
同　芝區　福島屋
同　山城京都　宇佐美書店
同　神戶　松田庄助
武藏橫濱　吉岡支店
同　弘田沼太右衛門
同　集堂
同　目黑十郎作
同　櫻井產
同　覺張治平
同　高橋恒
同　多田屋支店
同　長島爲一郎
同　煥乎堂
同　川又銀藏
同　川瀨代助
同　東書店
同　永
同　三輪文次郎
同　豐住藏次郎
同　川島九右衛門
同　關西圖書會社
同　古川正堂
同　柳小三郎
同　西澤喜太郎
同　水琴堂
同　鶴林堂
同　宮坂日新堂
同　高藤書店

陸前仙臺　佐藤文助
同　同　佐藤安次郎
同　木村助
同　薩崎祐之助
同　田中春助
同　吉見義次郎
同　博向堂
同　鶴鳴閣
同　便益堂
同　五十嵐太右衛門
羽前山形　成見清兵衛
羽後秋田　東海林書店
同　橫增田　大澤鮮進堂
同　橫手　今泉道次郎
陸奧弘前　日新館
越前福井　品川太右衛門
同　加賀金澤　宇都宮源平
越中富山　中田書店
同　高岡　學海堂
因幡鳥取　旭川堂
出雲松江　岡濟
備前岡山　武內彌三郎
安藝廣島　山本金正堂
同　長崎　積善館支店
周防山口　桂山陽堂
紀伊和歌山　宮井書店
土佐高知　開成舍
筑前博多　積善館支店
豐後大分　甲斐治平
同　肥前佐賀　守田壯助
筑後久留米　河內書店
薩摩鹿兒島　菊竹辛兵衛
肥後熊本　吉田次郎
渡島函館　長崎社
石狩札幌　小關文書店